

巢底部を下向きにして採蜜する巣箱の開口部にぴったりに合わせ固定する。

その上で、貯蜜部分であ

講演② 藤原愛弓氏
当会理事 博士（農学）

3月8日に行われた総会で、『これまでの活動と研究の概要』オオスズメバチ襲来時に行うニホンミツバチの行動で新発見』というタイトルで講演させていただきました。今回はその発表内容を要約してお伝えします。

最初に、私のこれまでの活動と経歴についてお話ししました。私は、日本で最も歴史の長い岩手県の養蜂家系（明治時代創業）に生まれ、幼少時よりミツバチをはじめ様々な生き物と関わりながら過ごしました。東京農業大学に入学後、「厚木ミツバチ研究会」を設立し、養蜂の普及啓発に努め、その後東京大学大学院に進学し、ニホンミツバチの保全と持続可能な養蜂に向けた生態研究を行い、学位を取得しました。在学中からこれまで各地で、ミツバチや養蜂に関する講演会、養蜂技術指導、ミツバチの保護活動等を実施してきました。また、「THE-鉄腕—ASHI—」への撮影協力や出演、新聞や養蜂誌などにおける記事連載・掲載なども行ってきました。

次に本講演のメインとして、私のこれまでの研究等の概要について、主に岩手県一関市（久保川イーハトーブ自然再生事業地）と奄美大島（世界自然遺産に登録）におけるニホンミツバチの研究についてピックアップしてお話ししました。これらの研究では、主に当会で開発されたニホンミツバチの縦型式巣箱と人工キンリョウヘン等を用いて、各調査地域に生息する本種の分封群を捕獲、または駆除されそうな営巣群を救出するなどして研究を実施しました。

奄美大島における研究は、2013年から開始しました。主な研究内容は、①ニホンミツバチの営巣場所・生息密度、②亜熱帯性気候下でのニホンミツバチの活動の季節変化、③ニホンミツバチの外敵とその関係と病気の有無、④奄美大島の在来種養蜂と歴史、⑤本土と奄美大島のニホンミツバチの違い（体サイズ・固有感）等です。現地の養蜂家や住民にも協力いただき、養蜂やミツバチの生息に関する情報を集めました。また、猛毒のハブが生息する奄美大島の里地や森林内における本種の生息・行動調査も行いました。

活動例①：ミツバチや養蜂に関する講演会、養蜂技術指導、保護活動等の実施



勤務大学の他、全国各地の企業、養蜂関連団体、法人等で養蜂指導や講演会実施



民家の屋根裏等に営巣したミツバチを駆除される前に保護、移動可能な巣箱に移し替え

美大島の里地や森林内における本種の生息・行動調査も行いました。

調査の結果、人里の家屋や墓等の営巣群は、殺虫剤などで駆除されたものも多かった一方、人の影響が少ない森林域の樹洞等では、より安定的に群れを維持していると考えられました。また、奄美大島と本土のニホンミツバチの遺伝的な違いを明らかにするために、京都産業大学と共同研究を実施しました。その結果、奄美大島は本土のものと非常に近縁であるものの、独自の特徴を持つことが分かり、生態、形態、遺伝的多

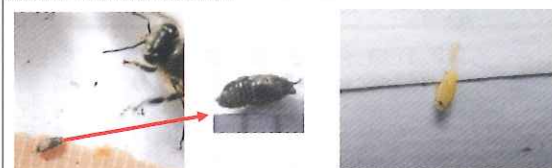
様性の観点からも保護すべき貴重な地域集団であることが示唆されました。

一方で私の調査研究から一部本土から本種の群れ（巣箱）が持ち込まれていることも明らかになりました。持ち込みにより、本土で猛威をふるうアカリンドニア病等が島内に持ち込まれて蔓延する可能性や、遺伝的な固有性が損なわれてしまう可能性が考えられます。島外から群れを持ち込まず、島内で保全していく必要があります。

続いて、2011年から開始した岩手県一関市の里山地域の研究についてです。本地域では、地元の寺院である知勝院により、継続的に里山の保全・再生活動（久保川イーハトーブ自然再生事業）が実施されています。元住職の千坂げんぽう氏のご厚意によりお借りしたログハウスに泊まり込

み、ニホンミツバチをログハウスの1階・2階や周辺地域で通年飼育しつつ、まさに寝食を共にしながら調査研究を行いました。具体的には、本種が利用する蜜・花粉源植物や本種の生態・行動、群れの活動の季節変化等について幅広く調査・研究を実施しました。

日々ミツバチたちと向き合いながら、長期的な調査と観察を行う中で、オオスズメバチの襲来時にニホンミツバチが行う複数の行動を様々な調査手法（塗り付け物質の観察、働き蜂の行動調査、DNA解析）を用いて世界で初めて発見し、その成果を公表しました。具体的には、本種が植物をは

働き蜂による昆虫類の採集・塗り付け行動を確認（2017年秋季）
働き蜂がカブトムシの幼虫や双翅目の幼虫・蛹を大顎に咬んで巣箱に持ち帰り、巣の出入口周囲に塗りつける行動が確認された。

これらの昆虫個体はいずれも新鮮な状態。傷口から体液が出ている個体も見られた。

ニホンミツバチがオオスズメバチの攻撃に際し、野外で生きた昆虫類を捕獲し、巣箱に持ち帰って巣の出入口周囲に塗り付ける行動は、著者から知る限り本研究が初の報告となる（採取された昆虫類のDNA解析も実施）。



論文発表等準備中

じめ多様な生物（昆虫、菌類、動物、コケ類などを含む様々な生物）を採集して巣の入口周囲に塗り付けることや、これらの採集の際に巣の入り口周囲で踊るダンスを用いて仲間へ情報を共有することを明らかにしました。現在も上記の調査研究については継続中です。最後になりますが、私は今年春から、宮城県石巻専修大学（専修大学の系列校）において生物科学科の専任講師に就任いたしました。ミツバチや養蜂をメインとして、教育・研究・啓発普及等の活動を継続・発展させていく予定ですので、引き続きどうぞよろしくお願いたします。

ミツバチサミット2025 開催のお知らせ（実行委員会の前田太郎さん（茨城県）からのお知らせです。）

今年、2年ぶりとなるミツバチサミットを開催します。セイヨウ・ニホンミツバチのプロアマ養蜂家、ポリネーションを行う生産者、ハチミツに関わる人々、養蜂学生、研究者、子どもからお年寄りまですべての人にミツバチと送粉者の大切さを知ってもらうことを目的にしています。

今回はアメリカからミネソタ大学名誉教授のMarla Spivakさんを特別ゲストに迎え、玉川大学の小野正人教授の基調講演を皮切りにスタートします。1日目と3日目はミツバチを始めたい人や専門家など少し深く学びたい人向けの技術講習会やシンポジウムを行い、2日目に子どもや一般の方が楽しんでもらえる企画を予定しています。1日目の夜にはウェルカムパーティを行いますので、ぜひご参加ください。



特別講演
Marla Spivak氏



基調講演 小野正人氏

【ミツバチサミット2025概要】

●場所 茨城県つくば市 つくば国際会議場

●日時

2025年11月22日（土）11:00～17:00（ウェルカムパーティ18:00～20:00）

23日（日）9:00～17:00 24日（祝）9:00～17:00

●主な日程

1日目 開会式・基調講演・ウェルカムパーティ

2日目 特別講演・キッズ企画・学生養蜂サミット・つくば物産展

3日目 閉会式

1～3日共通 シンポジウム・ポスター発表・マルシェ・ビジネスフェア・技術講習会・フォトコン写真展・ブックカフェ・ワークショップなど

●参加費：

高校生以下：無料

一般 3日券：3,000円（前売り）、3,500円（当日）

1日券：1,500円（前売り）、2,000円（当日）

●前売り期間：8月頃を予定（当日購入も可）

●主催：ミツバチサミット実行委員会

公式ホームページ <https://bee-summit.jp>

メール office@bee-summit.jp

（上記内容は変更される場合があります。最新情報は公式ホームページでご確認ください。）



本のご紹介

「虫がよろこぶ花図鑑」花の五つ星ガイド

前田太郎・岸茂樹 著 農山漁村文化協会刊

2025年3月 2420円（税込み）

虫がよろこんで訪れる花175種を詳解。園芸種はもちろん、野山や道端の花、作物の花について、訪れる虫の種類と、訪れる虫が好きな花の色、香り、形などがわかる。花蜜の糖度や花粉の量もわかり、季節の蜜源や花粉源にこだわりたい養蜂家にも必携。それぞれを定量データで見やすく掲載し、虫の訪れやすさを花ごとに比べやすい。また、

御園孝さん（埼玉県造園家）が解説する「蜜源植物の話」第59回目は「ソメイヨシノ」です。
銀座ミツバチプロジェクトが発足し、皇居のソメイヨシノの蜂蜜が販売されました。それまでソメイヨシノを眺め美しいと感じても、蜂蜜と結びつく事は全くありませんでした。菜の花やレンゲの蜂蜜は良く知られていますが、私の認識不足で他の多くの花と蜂蜜が結びつく事は無かったのです。しかしソメイヨシノの蜂蜜を口に含むと、その香りと爽やかな甘味が口から鼻の奥まで広がり、幸せな気分になる事ができ、蜂蜜を生産する花に対する思いに変化が出て来ました。

この様な体験以前は、ソメイヨシノが咲き出すと、井の頭公園や千鳥ヶ淵などの名所に繰り出して、飲めや歌えのどんちゃん騒ぎ。多くの酔っ払いにとって、満開のソメイヨシノはほんのお飾りで、飲むための手段でしかないのです。しかし、自然の営みは実に素晴らしく、冬がやると終わり暖かい季節になると、巣の中で縮こまっていたミツバチ達は、待つてました



梅王バチが次世代の女王を産んで巣を譲り、約半分のハチと共に巣別れして新しい巣を作るのです。
この一連の営みの基礎となるのが、ソメイヨシノなどの春の花です。実は、ソメイヨシノの蜂蜜を知った事で蜜源植物に興味をわき、多くの花を観察するようになりました。その後、ついに虫の訪花を確認する癖がついてしまいました。

と言わんばかりに、春一番の食料集めのためにソメイヨシノに乱舞します。大量の蜜と花粉を巣に持ち帰りせつせと子育てをし、小さくなっていた群れを大きくしていきます。そして、女王バチが次世代の女王を産んで巣を譲り、約半分のハチと共に巣別れして新しい巣を作るのです。



花ごとの名前の由来や花蜜・ハチミツの味など、訪花昆虫を研究しながら趣味で養蜂をしている著者ならではの面白情報も満載。虫の目線で花を見ることができるようになり、花と虫の奥深い関係に触れられる一冊（出版社の紹介文より）。

活動記録（25年1月）

★1/20 理事が代表を務める（一社）みつばち協会主催のオンライン勉強会が開催され、理事、会員が参加した。

★1/23 街路樹のニホンミツバチを保護した（会報誌98号参照）。

★事務局が会報誌2月号を作成、発行した。

★2/15 玉川大学ミツバチ科学研究センター主催の研究會が開催され、理事、会員、事務局が参加した。

★2/27 理事会、2/26 理事總會をオンラインで開催した。

★3/8 当会主催の講演会を開催した。



★中島英二さん（大分県）が菜の花を送ってくださいました。盛岡はまだ雪が残る中、ここだけ春が来た！



★藤元真紀子さん（岩手県）のキンリョウヘンは毎年みごとに咲きます。まだハチが集まった事がないので、今年こそは！

★3/13（一社）養蜂産業振興会主催の講演会が東京で開催され、藤原会長、会員が参加した。

★3/20 田中淳夫理事が副理事長を務める銀座ミツバチプロジェクト主催のオンライン「全国ミツバチプロジェクト会議」が開催され、会長、理事、会員、事務局が参加した。

★3/22 紫波町図書館（岩手県）主催の「夜のとしよかん」で、事務局が講師を務めた。

☆その他にも、会員の方の来訪対応や電話による飼育の質疑応答、資料室の整備等、日々さまざまな活動を行っています。

Bee space（ビースペース）とはミツバチの巣と巣のすき間のこと。すき間のコラムです。

Bee space

5月に入り、大きめのスズメバチが飛んでいるのを見かけました。巣を構える場所を探す女王バチでしょうか。スズメバチの女王バチについて気になっているのは、「どのように女王に分化するのか」です。ミツバチの場合は、王台の中でローヤルゼリーを食べた幼虫が女王バチになりますが、スズメバチにはローヤルゼリーに該当するものはありません。夏の終わり頃から働きバチによって作られる大型の巣房の中で、虫などのタンパク源をたくさん与えられて大きく育つ幼虫が、新女王バチとして羽化してきます。幼虫はタンパク源を消化するだけでなく、それを分解して糖とアミノ酸を豊富に含む液体を口元に分泌し、成虫がその液体を摂取する「栄養交換」が行われています。



6月末の日本バチ王台。下は別の巣の女王蜂。

中東に生息するオリエントスズメバチの最近の研究で、新女王バチになる幼虫と働き蜂になる幼虫では、分泌する液体の栄養成分に明確な違いが見られ、前者は後者と比べてアミノ酸を含む代謝物が多く、糖類が少ない事がわかりました。栄養交換と「女王分化」には何らかの関係がありそうです。

ミツバチやスズメバチと同じ社会性昆虫のヤマトシロアリ（ゴキブリ目）では、何とローヤルゼリーの様な特別食「ロイヤルフード」が、すでに日本人研究者により2023年に発見されていました。シロアリは木造家屋を破壊する害虫ですが、自然界では重要な分解者です。働きアリは、腸に共生する微生物と共に木質のセルロースを酢酸に分解し、それを自らの栄養源にしています。シロアリのコロニーには、繁殖だけに従事する王と女王がずっと一緒に存在し、働きアリが両者を識別してそれぞれに異なる成分の「ロイヤルフード」をろうつしで与えているそうです（写真下）。

例えば、人での脳機能改善が示唆されているアセチル-L-カルニチンは、王と女王両方の餌に共通する成分、精子細胞膜に含まれるスフィンゴミエリンは王の餌により多く、産卵と関係するジアセリグリセロールは女王の餌により多く含まれていること等が解明されました。王も女王も15年以上、時には30年以上も生きるようで、その長寿にびっくり（種によってはもっと長命）、すごいですね！ロイヤルフードのおかげでしょうか。

世界中には3,000種以上のシロアリが生息していて、ロイヤルフードは種によって異なる可能性があるとのこと。著者らは、人の健康長寿にも貢献する新たな機能性成分や情報を得ることが期待されると述べています。

私が所属していた研究室の先生が「昆虫は宝の山」とおっしゃっていたのを思い出しました。

上左 働きアリによる王への給餌。上右 女王への給餌。doi.org/10.1093/pnasnexus/pgad222 より。

★参考文献・doi: 10.1016/j.ibmb.2024.104128. ・「スズメバチの科学」小野正人著 1997年 海游舎
・「スズメバチ類の比較行動学」松浦誠 山根正気著1984年 北海道大学図書刊行会

（事務局 藤原由美子）

会員の皆様からの おたより・報告

★昨年11月に賛助会員としてご入会くださった（一社）茨城県ペストコントロール協会会長の岡村太郎さんに寄稿していただきました。『「ペストコントロール」という言葉をご存じない方が多いのではないのでしょうか。

「ペスト」は病名のペスト以外にも有害生物（ウイルスを含む）の全般を意味し、コントロールとは文字通り制御を意味します。人に有害な生物の活動を人の生活に害を及ぼさないレベルまで制御する技術を「ペストコントロール」と言い、これを行う業を「ペストコントロール業」と言います。茨城県ペストコントロール協会は、来年、創立55周



上 水害発生後の災害廃棄物置き場の消毒作業風景。下 長谷川清先生と一般家屋天井裏のみつばち保護活動の様子。

年を迎えますが、茨城県内の衛生管理と害虫防除の専門家として、地域社会の健康と安全を守ることを使命とし、長年にわたり害虫駆除の技術向上と啓発活動に尽力してきました。昔前は、ねずみ・ゴキブリ・ハエ・蚊などの衛生害虫駆除の相談が多くを占めていましたが、環境の変化や都市化の進展により、害虫や有害動物の問題は日々複雑化しています。インバウンドを起因とするトコジラミの再興や外来種のヒアリやアライグマの定着などによりペストコントロールの対象種の幅は大きく広がっています。もちろんスズメバチ・アシナガバチ、そしてミツバチなどの駆除依頼も年々増加しています。その中で、ミツバチに関しては2013年より当会の長谷



各市町村と「災害発生時・感染症蔓延時の消毒業務に関する協定」を締結。

川清理事にご指導とご協力を頂きまして、殺虫剤を使用した駆除ではなく保護活動することにしました。また、激甚化する災害発生時や新型コロナウイルスの感染症・高病原性鳥インフルエンザ蔓延時の消毒作業など防疫措置（感染症対応）も我々に課された大きな使命であると捉えて会員一丸となって対処しています。茨城県ペストコントロール協会は、感染症の消毒作業や害虫防除を単なる駆除作業ではなく、環境保全や衛生管理の一環として捉えています。地域の皆様が安心して暮らせる環境を守るため、今後も日本みつばちの会の皆さまと保護活動を通じて、交流を深めていきたいと心より願っております。』

★引地恵さん（宮城県一般社団法人MATALIS代表理事）の活動について寄稿していただきました。『MATALISは、震災後に地元女性達で立ち上げた団体です。地域住民の交流促進と新たなコミュニティ創りのために手しごとワークショップやイベントを開催。東日本大震災の被災地である宮城県亘理町で「人と学びの環」を創ることを目的として活動しています。

2016年度には地域の皆さんがお茶を飲んで語り合えるような居場所となるカフェの運営も開始しました。活動を続ける中で、担い手不足のため耕作されていない遊休農地の増加という新しい課題が見えてきました。また、当法人の代表引地による地域文化調査により、果樹栽培を行う農家ではかつて花粉交配や自家消



被災した沿岸部でのミツバチ飼育



上 巣箱周辺の環境整備、暑さ対策のシート張り。下 セイヨウミツバチの内検。

費用はちみつ採取のための小規模養蜂が行われていたこと、ミツバチ（俗称…スガリ）は地域住民にとって馴染み深い生き物であることが明らかとなり、里山には少数ですが、ニホンミツバチも生息していることも分かってきました。私たちは大切な地域資源である農地活用にも貢献したいと考え、2021年度からミツバチプロジェクトに取り組み始めました（現在セイヨウミツバチ11群飼育）。農地の荒廃を防ぎ景観を維持するためのビーガードンづくりや地域内に自生する蜜源を調査し蜜源マップを製作するなど、町固有の地域資源である豊かな自然と人々が調和し共生できる「持続可能な地域の未来創り」を目指しています。今年度は受粉のお手伝い

のためにブルーベリー農園にも巣箱を設置したほか、津波の被害を受けた沿岸部の未利用地におけるニセアカシアのはちみつ採取にもチャレンジ。巣箱設置場所周辺の環境整備の一環として、コスモエコ基金の助成を受けて竹林伐採と竹炭づくりも行っています。これからもミツバチの生態や地域の自然への学びを深めながら、採集したハチミツを皆で分かち合い、心も身体も健康で笑顔で暮らせる「亘理らしい地域復興」を目指していきます。※ミツバチプロジェクトの立ち上げに際し、会長はじめ理事、事務局の皆様から温かいご指導をいただきました。この場をお借りして心から御礼申し上げます。』



★宇垣常見さん（島根県）から「サスピュア・ビーズケア」を使い、子出し、下痢便、アカリシダニを克服」というお便りを頂きました。

『趣味として始めた日本蜜蜂の養蜂が10年になりましたが、1群しかない時や0の時があり、子出しや徘徊に悩んでいました。そんな時に会員の三浦さんに相談したところ、「サスピュア」の記事を紹介されました（メントールは使っていたのですが）。記事に掲載されていた加藤十四幸さん（福岡県）と連絡を取り、細かく教えて頂きました。サスピュアの使用により、蜂が大変元気になり、一昨年は1群で6回採蜜し、二万九百二十cc（一斗一升六合）の蜂蜜が採れました。昨年は仲間に子出し、徘徊の現象が出た時急行し、箱の上下からサスピュアを

右 2月20日、徘徊と下痢糞を発見した。下 2月27日、巣の下の方を切り落とした。



左 3月9日、10日間で修復・再生した巣。下 3月11日、12日間で元気になった巣。



噴霧したところ子出し、徘徊が止まり、蜂が元気になり採蜜もできました。私の言うことを受け止めなかった養蜂仲間3名は、昨年末全員蜂がいなくなりました。昨年12月1日の全国みつばちフォーラム（於 北九州）に参加し、サスピュアの進化形「ビーズケア」を知り、仲間にも伝え、喜んで頂いています。

ここで私の失敗例ですが、普段の利用（2〜3週間に一度、巢門や天板の掃除をし、ビーズケアを上下から満遍なく吹き付ける）を忘り、1月6日から2月20日まで放置した群に下痢糞、徘徊が発生しました。2月27日、箱を横にして巣の下を切り、ビーズケアをたっぷり上下から噴霧し、天板も掃除しました。砂糖水も作り、蜂蜜少々とビーズケア（500ccボトルに4プッシュ）を入れ給餌したところ、子出し、下痢糞が止まり、花粉を持ち帰るようになりました。分封が楽しみです。

ポイントは2〜3週間に一

度の掃除、ビーズケアの噴霧だと肝に命じました。また、現象を早めに見つけ、早期の対処が早期回復につながります。私の喜びが養蜂仲間にも伝わり、隣接市町村より多くの養蜂者が見学や話を聞きに来られます。私も喜んでいますが、蜂も喜んでくれるでしょう。』

★長谷川清さん（茨城県理事 獣医師）から「いのちの森つくり第8回植樹会」の報告をいただきました。

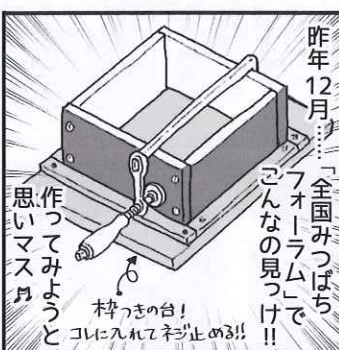
『3月2日、ミツバチ達の蜜源をつくる植樹会を城里町徳蔵の里山で行いました。盛田守さんの約5町歩の山で、御園孝さんの指導のもと、会員の方も参加して毎年植樹をしています。（一社）日本在来種みつばちの会、（一社）みつばち協会、銀座ミツバチプロジェクトの共催で、トチノキ、ケンボナシ、ビービーツリー、ユリノキ等13種類、301.5m³の大苗を50本、30名の参加を得て植えるこ



大苗は機械で運搬しました。人が入るくらい大きな穴を掘って植えます。

とができました。お昼は盛田家の美味しいおにぎりとお汁を飲みながら、植樹後に記念撮影をして終了しました。』

初巣箱づくり②



坂本香代子さん（山口県）が描いてくださる「養蜂4コマ漫画」第2弾です。共感することばかりで、主人公を応援したくなります。

★多良良総子さん（神奈川県）から環境教育発表会のお便りを頂きました。

『息子の龍聖が通う鎌倉市の小学校で、環境をテーマにした総合学習発表会がありました。6年生120人と鎌倉市教育委員会の視察者、保護者の前で体育館にブースを設けて、グループごとに発表を行いました。鎌倉市は生徒が発表した企画に対するクラウドファンディングに力を入れており、小学校の総合学習授業に取り入れられています。』

「ハチ」をテーマに選んだ龍聖のグループは、テレビモニターに写真を映し出して、クイズ形式で発表してゆきました。1年生の時に一人1台配布されたアイパッドを使ってレイアウトしていました。4人で考えた質問を藤原愛弓さん（当会理事 農学博士）にハチの専門家として回答をお願いしたところ、快く引き受けてくれました。質問の内容は、①ハチがいなくなったら世界はどうなりますか？②ハチの中でどの種類が絶滅しそうですか？③減っているハチの種類はありますか？④ハチはどのように減ってしまったのか？⑤もう絶滅しているハチは何ですか？

⑥最近発見された一番新しいハチは何ですか？でした。

会場にいた教育委員会の方が「いいテーマだね」と興味を持ってくれました。

龍聖は吃音があるので、人前での発表は言葉が詰まって声が出ない事が多いのですが、「僕はプロの養蜂家だから将来の夢はハチ博士になること。だからがんばってみる。」と、セリフ練習を何度も繰り返ししていました。

本番では、順番にクイズを出題。龍聖は緊張から小さめの声でしたが、しっかりと説明ができていました。日頃よくハチの話を学校でしている事もあってハチに興味を持ってくれるお友だちが増えてきました。「龍聖君のおかげで家でハチの話をするようになったよ。」とよく言われます。

今年も龍聖といっしょに親子でミツバチサミットに参加したいと思っています。」



上 龍聖君が載っている2023年のこどもみつばちさみっとの表紙。中 将来の夢は「ミツバチやスズメバチの研究者になること」右 巣箱の前で迷彩柄の防護服に身を包んだ龍聖君。

★前号で報告した街路樹から保護したニホンミツバチ、当初は蜂場に置く予定でしたが、当会の会議室に設置して、見学できるようにしました。藤原会長が様々な工夫を凝らし、アクリル製の窓を作って四方から見られるようになっていました。

これまでに相当な振動、騒音を与えてしまい、逃去するのではとドキドキしていましたが、太っ腹な気質（？）のハチさん達、しっかりと定着して、元氣よく出入りしています。元々、交

通量の多い道路の街路樹で暮らしていたからかもしれません。目の前に巣があっても、ハチさん達も秘密のベールに隠されて巣の内側の様子はなかなか見えませんが、外側からだけでも色々な場面が見られます。花粉を運んできて、表面を覆っているハチ達の中へもぐりこんでいく様子は何ともかわいらしいです。蜂数の増え方がとても早いことにも驚きました。



5/6 右の窓から撮影。



4/5 右の窓から撮影。



5/6 左の窓から撮影。



4/11 左の窓から撮影。



5月6日下から撮影。ビーズケースをかけて蜂を移動。

事務局より お知らせ

「今年度会費納入のお願いと本のご紹介」

本会の運営は、多くは皆様からの会費により、担われております。また、本会は1月から12月を年度とする暦年制です。毎年**の会費（変更有）のお支払いをお願い致します（左下を参照）。**

また「日本ミツバチ在来種養蜂の実践」（農文協刊）と、「だれでも飼える日本ミツバチ」（農文協刊）、「ミツバチと暮らす」（無明舎出版刊）も会員特価（各千五百円）で事務局にて販売しています。

★「会員名簿について」
名簿をご希望の方は、「会員名簿申込書」にご記入いただき、事務局へ郵送、またはFAXでお申込みください。日本在来種みつばちの会会員名簿は、会員の同意を得て作成しているものです。名簿には個人情報を含みますので、その取り扱いには細心の注意をいただき、以下について同意の上ご使用願います。本会の趣旨と異なる目的で名簿をご使用の

場合には、配布をお断りする場合がございますのであらかじめご了承ください。

・お申し込み時の目的以外でのご使用は、ご遠慮ください。目的でのご使用が済み次第名簿は返納、または破棄してください。

・名簿の利用は申込者本人のみに限ります。他者への名簿の貸出し・配布・コピー等は、会員同士であってもご遠慮ください。また、名簿が本人以外の者にわたることが無いよう取扱いにはご注意ください。取扱いの違反によるトラブルは、当会では責任を負いかねます。

・名簿を利用して連絡をとる場合には、「日本在来種みつばちの会会員であること」、「会の承諾を得て名簿を使い、連絡を取ったこと」、「連絡の目的」を必ず相手にお知らせください。

・名簿請求の範囲は、基本的ににお住いの都道府県限定となっております。

★退会をご希望の場合は、電話、メール等で事務局へご一報ください。再入会はいつでも歓迎いたします。

★ミツバチを飼育する場合は「飼育届」を、県をまたいで移動する時は「転飼届」

を各都道府県の担当当局に提出してください。

★「次号のお知らせ」

次回の会報誌は、夏（8月号）を予定しています。

★事務局の藤原がしばらく不在の場合があります。対応の遅れ等、ご容赦くださいますようお願い致します。



事務局のビル屋上から撮影した岩手山 4/19



講演会には60名程が参加。遠くは愛媛県からもいらしてくださいました。

「公益社団法人

神奈川県ペストコントロール協会」様が賛助会員としてご入会くださいました。

協会では、市民の安定した生活を守るために、有害生物防除対策、感染症対策、環境保護対策、教育・啓発活動等、幅広い活動に取り組まれています。また、毎年開催する「ムシの日」イベントや機関誌『情報発信fromかながわ』の発行により、ペストコントロール業の重要性をアピールされています。当会HPともリンクさせていただいていますので、どうぞご覧ください。

この度、当会の藤原愛弓理事（宮城県博士（農学））が、協会の会員様からニホンミツバチの保護を依頼され、その活動もきっかけとなりご入会くださいました。末永くよろしくお願い致します。

- 講演会の出欠ハガキより
- ・日本蜜蜂の定着率が下がっているように感じる（茨城県）。
 - ・日本蜜蜂の群れが我が家の庭から去って3回目の春。今年こそは入居して蜜蜂と暮らしたい（神奈川県）。
 - ・昨年の夏秋の天候異常の影響か、貯蜜が無く全滅。一群もいない正月だった（香川県）。
 - ・キンリョウヘンは二重ハウスの中で順調に育っている。昨年逃げた蜂達を捕獲しようと思っているが・・・（兵庫県）。
 - ・養蜂は大事だが、蜜源が不足している。蜜源作りを今年から頑張りたい、蜂は後から付いてくると思って（千葉県）。
 - ・自然の元巣が少なくなった。昨年は待ち箱20置いて1箱のみ（長野県）。
 - ・昨年までは越冬に成功していたが、今年は失敗。12月頃入口の前で死んでいる蜂が多い。原因を考察しながら春の捕獲に挑戦（青森県）。
 - ・「養老先生と虫」を読んで、蜜蜂や養蜂に通じると感じた（新潟県）。

理事総会開催のご報告

3月26日、理事総会がオンラインで開催され、令和6年度の決算が承認されました。現在、事務局移転から2年、一般社団法人になってから1年半程たちましたが、運営はまだ厳しい状況です。引き続き、皆様のご協力をよろしくお願い致します。会長 藤原誠太

会費（3,800円）の納入確認について

会費は毎年、お支払くださいますようお願い致します。お支払いいただくと、封書の宛名の後ろの年月日が更新されます。例えば R7.5.5は、令和7年5月5日にお支払いいただいたという意味です。更新されていない場合は恐れ入りますが、事務局までお問い合わせください。

〒〇〇〇-〇〇〇〇
〇〇県〇〇市〇〇-〇〇
〇〇〇〇様 (R7.5.5)

★「編集後記」
・ビーズケアの販売を開始して約3ヶ月たちました。お使いになった会員の方からの感想をいただければと思います。どうぞよろしくお願い致します。

・電信柱にニホンミツバチが入ることはよくあります。ある会員の方が、毎年電信柱からの分封を楽しみにしていたら、その穴を塞がれてしまったと嘆いていらつしやいました。熊が電信柱に引き寄せられるのを防ぐためだそうです・・・

・植物のキンリョウヘンは完売となりましたが、人工キンリョウヘンは好評販売中です。いつでも使えて便利！（事務局 藤原由美子）